

「日本写真保存センター」調査活動報告(23)

陽の目を見ないまま眠っている写真原板に光明を！

松本 徳彦（副会長）

写真保存センターが収集する写真原板には、日本人の日々の暮らしや伝統文化に至るさまざまな記録や表現がある。言うならば日本人の営みの森羅万象が対象ということになる。既に消え失せた伝統や祭事、習俗などが全国至るところに眠っている。それらを掘り起こす活動を展開したい。素封家から社寺や郷土資料館などに寄贈されたが予算不足で眠ったままの写真原板が数多くあるといわれている。みなさまの力でそれらに光明を与え生き返らせたい。息の長い活動ですが、みなさまの力で生き返らせ古き時代を甦らそうではありませんか。

報道写真家の鋭い眼で捉えたドキュメント 吉岡専造（1916～2005）

戦後の写真を語るには、新聞社のスタッフ写真部員の仕事を抜きに語ることはできない。特に朝日新聞社の写真部員の仕事ぶりは群を抜いていた。朝日新聞の紙面を飾る写真のほとんどは写真部員でこなし、『アサヒグラフ』や『週刊朝日』『科学朝日』『朝日ジャーナル』『アサヒカメラ』などの出版関係の写真は、出版写真部が受け持っていた。他では、毎日新聞社もほぼ同様な体制であった。

朝日の出版写真部には大東元、吉岡専造、島田謹介、小久保善吉、船山克、秋元啓一など多彩なスタッフがいて、それぞれが腕をふるっていた。また、誌面での秀作は『アサヒカメラ年鑑』や『朝日報道写真集』に再掲載されたり、『アサヒカメラ』での特集で採り上げられたりと優れた写真を評価していた。それだけに撮る写真家たちも相当刺激を受け、互いに写真表現にしのぎを削り、斬新さや創造力が問われていた。そうした環境が写真表現の活力を生み、社外の写真家たちにまで刺激となっていたことは間違いない。そこには戦前から目で読ませる写真への期待と写真表現の未来を展望する編集者や経営陣の心意気が社風となっていたからでもある。

その中で吉岡は社会で起こっている様々な事象を、

多角的に捉える眼力やニュースとして捉える臭覚を備えた写真家であった。その典型ともいえる写真が『アサヒカメラ』1957年3月号の「現代の感情」シリーズに載った「鳩山退場」である。1956年12月14日、日比谷公会堂で開かれた自由民主党大会の取材に、多くの写真家は公会堂の演台前に陣取り鳩山一郎首相の動向に注視していた。

吉岡は皆とは異なる舞台上手の退場口で、鳩山が秘書の肩に手をかけうなだれ憔悴し切った姿で引き上げてくる瞬間を捉えたもので、画面には見送る岸信介、石井光次郎、水田三喜男、田中角栄などが複雑な表情で居並ぶ様子が捉えられていた。『アサヒカメラ年鑑』1958年版の「作家と作品」で伊奈信男は「すぐれたニュース写真であると同時に、素材に対する人間的な分析によって、内容が的確に把握されている永続性のある報道写真でもある。（中略）全体の心理的な要素を浮かび上がらせ、単なる感傷にのみ陥らせることなく、劇的な表現にまで到達させている。」と適評している。この写真に対し第3回毎日写真賞が贈られている。

『アサヒカメラ』の現代の感情シリーズでは、1952年「傍聴席」、「運命の子供」、「宴会」、53年「記者会見」、54年「集団面接試験」、55年「ビケライン」、「供出米品質調査」、56年「合掌する人々」、「大衆温泉場にて」など、時代の動向を真摯に見つめた秀作が毎月のように載って



「葉巻を吸う吉田茂」 1966年

（撮影：吉岡専造）



「鳩山退場」 1956年

（撮影：吉岡専造）

いた。この社会の動向を社会批評的な目で捉える手法は、1959年に創刊された『朝日ジャーナル』誌の連載「現代語感」で活躍した富山治夫の眼にも受け継がれたようだ。

吉岡には人物撮影にも優れたものが多い。50年の「人間零歳」1960年（撮影：吉岡専造）「伊藤薫朔」、

51年「巖本眞理」、「關魂・横綱千代の山」などがある。なかでも67年から撮り始めた「吉田茂」は写真嫌いであるが有名だったが、吉岡に対しては自宅にまで招き入れ、吉田の身辺まで心おきなく存分に撮影を許し写真集『吉田茂』（朝日新聞社71年刊）を上梓している。また一人息子の真司の誕生から1年間の育児記録を『週刊朝日』に連載し、夫人の育児日記とともに『人間零歳』（60年）として刊行する。こうした一連の吉岡の写真原板は日本写真保存センターが収集し保存しているが、「吉田茂」の写真に関しては、朝日新聞社在職中の法人著作ということで、原板は写真保存センターが保存と活用を、デジタルデータは朝日新聞社が所有し朝日新聞フォトアーカイブとして利活用することになっている。

日本写真保存センターが収集保存している吉岡専造の写真原板は、吉田茂をはじめ朝日新聞社在職中に撮影したフィルムを、ロールフィルムが433本、4×5フィルム163枚ほか25枚の原板を保存している。現在保存センターのホームページで画像を検索することができる。

吉岡専造(よしおか・せんぞう)

1916(大正5)年東京で生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学)写真部を卒業し、東京朝日新聞社に入社、出版写真部勤務。40~41年に従軍し、42年から海軍報道班員として活動。戦後は『アサヒグラフ』『アサヒカメラ』をベースに高度経済成長時代の日本社会を撮影。退職後宮内庁嘱託として昭和天皇一家を撮影する。2005年没。



「人間零歳」1960年（撮影：吉岡専造）

表現の多様性を追求する職人肌の眼

大束元(1912~1992)

出版写真部で吉岡の先輩にあたる大束元(1912~1992)の作品に雪が降りしきる夜の銀座で、自動車のヘッドライトによって浮かび上がった男女が道路を横断している瞬間を捉えた「雪の幻想」(53年)がある。また、数寄屋橋の袂にあった朝日新聞社本社の写真部の窓から銀座方面を遠望した「東京雪景」(51年)は、雪が降る様子を事前に撮影しておいた雪模様と、霞む銀座の街景を合成した写真が、情景を象徴的に表したものとして評価された。お茶の水の「ニコライ堂」(51年)の頂上ドーム屋根を、4×5判カメラのワイドレンズで2枚撮り、つなぎ合わせることでスケールの大きい作品とした。さらに丸の内のビル街にカメラを据え、数十分もの長時間露出で、動いているものは消え失せ、ビル街が灰色に覆われたような写真を作り出し、「死の灰に覆われた街」(62年)を創りだすなど、その斬新なイメージが話題を呼んだ。吉岡が世相の一断面を切り取り瞬間描写の巧みさで評価を得た一方で、大束は現実のイメージをより抽象的な世界へと導き、そこに現代の印象を投影した作品を生み出す職人肌のスケールのある写真を創りだしていた。これらの実験的な写真が表現の多様性を示している。収蔵しているロールフィルム439本。



「ニコライ堂」1951年

(撮影：大束元)

大束元(おおつか・げん)

1912(明治45)東京で生まれ、写真修整技術の先駆者であった父の勧めで朝日新聞社写真部に入社。父譲りの巧みな画像修正技術の腕前をみこまれ、当時の新聞では欠かせなかった張り合わせ合成やエアブラッシュによる修正技術で作られた写真の数々がある。

写真展のお知らせ

吉岡専造作品展「眼と感情」

日時：2月28日(火)~3月26日(日)

10:00~17:00 月曜休館 無料

展示：点数60点(モノクロ)

会場：JCII フォトサロン(03-3261-0300)